
ークレットゲーム CODE:Revise ~ The Number Limitation ~

zero

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

シークレットゲーム CODE:Revise The Number Limitation

【Nコード】

N4252S

【作者名】

zero

【あらすじ】

『シークレットゲーム』

それは、限られた者しか知ることができない秘密の遊び――

突然に置かれた地獄の空間。

そこに集められた14人。

与えられたルール、クリア条件、特殊機能。

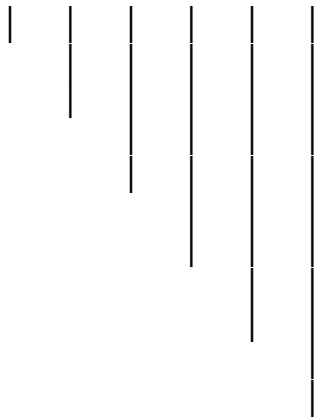
条件を満たさなければ、その者の末路は『死』だけ。

死又ノガ恐イナラ殺ルシカナイ……

殺ルノガ恐イナラ死又シカナイ……

いま、各々の生命を賭けた闘いが始まろうとしている――

00



「……………んん」

耳の中に侵入してくるざわめきによって次第に覚醒度が高まっていく。半目開いた状態で体を起こしてみると、そこには見覚えのない空間が広がっていた。目を覚まさせたざわめきというのは虫の鳴き声のようであり、音源は彼らの住処であろう密集した草木から聞こえてくる。

「——ッ！」

意識を失って寝ていた場所が雑に整備された土の道だと気がついた時、東条煉の覚醒度は最高潮にまで回復した。すぐに体を引き起こし、周囲を見回しながらつい最近護身用に使っていたナイフを取り出そうとする。

（ナイフが無い！？ …… いや、だったらどうして——）

多少曖昧ではあるが、突然襲われた何人もの黒服の男から逃れるために人気のない林の中まで全速力で逃げきり、一段落ついたと油断をした瞬間に首元に強い振動が加えられたような気がする。煉の意識が無くなっていたときに何があったのかは分からないが、ナイフが手元に無いという事は誰かが煉を見つけたということになる。

あんな道が無いような林に来るといったら煉を追っていた者しか考えられない。だが、いまの東条煉は殺されていないし、拘束すらされていない……。

「ここは、何処なんだ……………」

ふと周りを見渡してみると背の低い広葉樹が煉の立っている道を囲っていた。煉が逃げ込んだ林はこんな道のようなものは無かったし、何よりもつと背の高い木々が沢山連なっていたはずだったのだ。これを同じ森だという可能性はかなり低く、例え同じだとしても煉が気絶させられた場所からかなり離れたところだろう。

「痛ッ……」

硬い土を寢床にしていたので背中が悲鳴を上げてしまっていた。しばらくの間は体を動かすたびに違和を感じるようになるかもしれないが、そこまで気にする程ではないので大丈夫だろう。

取りあえず煉は身の回りの持ち物を確認しながら今自分が置かれている状況を整理することにした。

- ・東条煉は突然何者かによってこの場所へ拉致された。

- ・ここは盆地形の山であり周辺に人が頻繁に通っている形跡は見られない。

- ・鞆に入っていたものは携帯電話とメモ帳と黒ペンだけであり、凶器となるものは没収されている。

- ・電波は圏外であり、外部と通信する手は完全に切られている。

ここへ連れてきた者が煉に何をさせたいのかは分からないが、取り

あえずこの孤立した空間へ閉じ込めておきたいという事は分かった。暗くて見にくいのだがよくよく目を凝らしてみると、若木に監視力メラが取り付けられていてこちらを監視しているのだ。一般社会とは隔離されたこの空間に取り残された煉を、遠くから監視して何かをして貰おうという事を考えているのだろう。それは、普通の世界ならば許されないような、そんな狂気染みたことのはずだ。煉がそのような事でまず最初に思い浮かべたのは……………

——コ ロ シ ア イ

「なッ!？」

そんな物騒なことを考えていた矢先に、突然聞いたことが無い電子音が煉の耳を刺した。一瞬身を微動させて戦闘体勢に入るが、しばらくしてその音源は煉のポケットだということに気がついた。

（これは……………PDAなのか？）

ゆっくり取り出してみると、煉の手には手持ちサイズの携帯情報端末——PDAが握られていた。黒を基調としたデザインであり、液晶に一切の指紋や汚れが無い事から新品であるということが分かる。携帯電話や小型ノートパソコンが普及している今の時代、PDAの影はかなり薄まってきているのでわざわざ買おうとはあまり思わないだろう。だから煉はこんなものを所持していなかったはずなのだ……………。

取りあえず画面を押してみると、まず目に入ったのは『3:00』と記載されている現在時刻を表示しているのである。数字だった。3時になるとアラームが鳴るようにセットされていたのかもしれないが、どうなのかは分からない……………。携帯電話の時刻を見ると、時刻は大体同じだったのでこれが正しい時刻を示していると考えても良さそうである。

適当に操作をしていると今度は画面に3つのアイコンが現れた。どうやらこれらのアイコンは左から見て『人』『旗』『地図』を表しているらしく、さっさとどれかを押せと言わんばかりにそれらはしきりにチカチカしていた。どうせ3つとも見るのでどれからでも良いので左から順に見ていくことにした。

「東条煉、プレイヤーナンバー…………『10』？」

『人』を押してすぐに表示されたのは紛れもなく煉の本名であり、プレイヤーナンバー『10』と記載されていることから、煉は何かしらの行事への参加を強いられている様だった。プレイヤーナンバーだけならまだしも、本名が載っていてこのPDAが東条煉専用だと主張してしまったのだからこれが単なる冗談だとは到底思えなかった。

この周囲の環境やPDA、監視カメラなどから、明らかにこれから雲行きが怪しくなっていくであろう事に煉は独り舌打ちをする。いや、もうすでにこの時点で大体これからどのようなようになっていくのかを確信していたのかもしれない――

【クリア条件】

終了時、生存者のプレイヤーナンバーの数の合計が21以上であること

次のページに表記されていたのは、クリア条件といういかにもゲームの中で出てきそうな単語だった。煉はクリア条件という名目には焦点を一切当てずにその内容についてよく注目した。終了時、というのは何のことか不明なので保留にしておく事にして、『21以上』という言葉に目を細める。

（『21』という事は、つまり俺以外にも他に誰かいるという事が……）

煉のプレイヤーナンバーが『10』であることから、何人か他のプレイヤーがいると想定できる。また、ナンバーと言っていることから、常識的に考えてみれば最低でも1～9のナンバーのプレイヤーがいるはずである。ただ、いま煉が置かれている状況が全く以て常識的とは言えないので期待を裏切られる可能性は大いにありそうだ……。

もう一度クリア条件を見直すと『生存者』という言葉に目が留まった。

生存の逆は死亡である。

つまりこれからしようとしている何かは、恐らく死者が出るものだと考えられるのだ。一般社会から乖離されたこの空間で、映画で見たことがあるような一般人同士の殺し合いが始まる、という冗談じみた予想が当たりそうな事に煉は苦い顔をして溜息をついた………。

クリア条件を満たすことによって何かどうなるのかという事はよく分からないが、これはゲームなのだからそれを満たさなければ相応のペナルティーが与えられるだろう。『人』で得られる情報はもう無いので再びメニュー画面へ戻った。

何はともあれ今ここが何処でまてとは言わないが、ここがどういった地形なのかという事ぐらいは分かるだろうと思って次は『地図』を押す。

「……………」

まず目に入ったのはしきりに点滅している赤い点だった。この地図によると、ゲームフィールドは赤い線で5×5の計25個のエリアに区分されているらしい。左上から右へかけて『01』『02』となっていて一段目の右端は『05』となっている。

恐らくこの赤い光点が現在位置であり、そうであると仮定すると煉は今エリア『03』にいる事になるのだろう。また、煉の居場所は比較的標高が高い場所にいるらしく、縮尺が分からないので明言は

できないが平地へ行くのには結構時間が掛かるだろう。

『地図』の信憑性については今後行動したときに確認すれば分かるだろう、と思って次は『旗』を押してみた。

【PDA特殊機能】

半径10m以内にある自分以外のPDAのプレイヤーナンバーの合計数を表示する

特殊機能という事は、これは煉のPDAだけに与えられた機能だと言ふことなのだろう。恐らくこの特殊機能はプレイヤーナンバーが大きい者を見つげるためのものである。となると、このゲームの主催者はそれなりにゲームがクリア出来るようにちゃんと考えられているらしい。

また、こういった特殊機能というものは他のプレイヤーにも当然与えられているだろう。このゲームの趣旨が分からないので何とも言えないが、クリア条件によっては煉とは違って相手を攻撃するようなものがあるかもしれない。

それに、煉の特殊機能にあった『m』という制限にも注目しておかなければならない。恐らくは他の特殊機能にも煉と同じような制限をかけられているものが存在していて、強力なものほど制限範囲は狭まっていくようにできているはずだ。つまり、あまり不用意に他人に近づくのは危険だろう……。

「……………腹が減ったな」

一連の確認が済んだところで気が緩んでしまつて、それと同時にしばらく忘れていた空腹感が一気に押し寄せてきた。何でもいいから取りあえず食べなければ力が出ないと思い、煉は道から外れた草木が生い茂るところへ侵入して食材を漁る事にした。

（クソッ……どれも食べれない物ばかりじゃないか！）

——食料探しから数十分が経過した。

周囲には食べてくださいと言わんばかりにキノコが沢山生えているのだが、どれも毒性のあるものばかりで手のつけようが無かった。いや、もしかしたらこのゲームの主催者がわざとこうやって知識の無い飢えた者に食わせようと植えたのかもしれない。何はともあれ煉は、食べられない事と足場の悪い事に苛立ちを隠せないでいた。身体機能が人間である以上、いくら理性で押し切ったとしても三大欲求の内の1つがずっと満たされなければ冷静さがかけてしまうのも無理は無い。

「これは……なんだ？」

何度目か分からない舌打ちをしようとしたその時、煉の足元に何やら白い箱が転がっている事に気がついた。持ち上げてみると意外にもそれは大きく、またその大きさにはそぐわない軽さだった。これだけ軽ければこの中に爆発物が入っている可能性はほぼ無いに等しいので、警戒心を薄めてから煉は微かに期待をしてその箱をゆっくりと開けた。

(……………メモリーチップっていう奴か?)

箱の中に入っていた何重にも包装されたものをゆっくり開放していくと、残ったのはメモリーチップが1つだけだった。包装を剥いでいる途中で食料ではない事には気がついていたが、まさかこんなものが入っているとは思っても見なかった。

「ん……………もしかして——」

メモリーチップをじっと見つめていると脳裏にPDAが映し出された。あの時はPDAの中身に集中していたのだが、PDA本体の事はあまり観察していなかったのだ。PDA——携帯情報端末なのだから、それには情報の出し入れをすることができる箇所が無くてはならないはずなのだ。

即座にPDAをポケットから取り出して側面を確認するとすぐに目的の箇所は見つかった。メモリーチップは一応精密機械なので、こんな時だからこそ普段なら考えられないような慎重さでそれを持ち上げてゆっくりとPDAに差し込んだ——

「ここに何かがある、ということか……………」

メモリーチップを差し込むとPDAの画面は強制的に地図に移動された。見ると煉の起きた場所の近くに青い光点が点滅していたが、

光点を押してみたりしても何も反応は無くただ点滅を続けるだけだった。現実的に考えてみるとどういふことなのかはさっぱり分からないが、空想的にこれが仮にゲームだと考えると『宝の地図』のような感じなのではないか、と煉は思った。

つまり、この青点の場所に何か有利なものが隠されている……みた
いな。

（考える前に行動しろ……だよな？——）

いつまでも何かを考え続けていても、何も得ることはできない。

いつまでも何かに縛られてずっと立ち止まっても、何も進歩することはできない。

いつまでも過去に縋^{すが}りついていても、何も未来に突き進むことはできない。

東条煉はその事については十二分に理解をしていた——

「……ふう」

青点の場所に辿り着いてみると何も無かったのだが、『宝の地図』の法則で地面を掘れば良いのだということにはすぐに気がついた。スコップも何も無い状態で大丈夫かと思っていたが、案外素手で少し掘っただけでお宝は姿を現した。

最初は全てを掘り起こそうかと思っていたのだが、思った以上に大

きな鉄製の箱だったので表面だけ掘り起こして蓋を開ける事にした。
そして今、後は蓋を開けるだけで良いという状況になっている。

「携帯食料、水、ライター……………ッ！」

上から箱に入っているサバイバルに必要な物を取り出していると、煉の手に何かひんやりした物が当たった。一瞬手を引っ込めるが再びゆっくりとその場所へ手を伸ばす……。

「やっぱり……………あるんだよな」

それは、映画やゲームでよく見たことのある……………いや、嘗て東条煉が使った事がある――

沈黙する暗黒の世界に刹那だけ湧いた鳴き声が漏れ、その声に反応した野鳥が一斉に黒い空に飛び回りだした。

手が軽く痺れる感覚が懐かしくて、それ以上に切ない気持ちで一杯だった――

「ん？」

そんな感情を完全に無視するかのようにして突然PDAが騒がしく鳴りはじめた。画面に映し出された内容を見ながら煉はゆっくり食事をすることにした。

【ルール1】

プレイヤーには各自固有のPDAが与えられる。
PDAに表示された『クリア条件』をゲーム終了までに達成せよ。
なお、ゲーム終了日時については後日通知される。

【ルール2】

プレイヤーは、装着された『首輪』を外してはならない。

【ルール3】

ゲームのフィールドは区画分けされた複数のエリアから構成されている。

プレイヤーは、制限されたフィールドから外へ出てはならない。

【ルール4】

ゲームには複数のプレイヤーが参加している。
他者のPDAの所有・使用は自由だが、クリア条件が成立するのは
初期に配布されたPDAにのみ限定される。

【ルール5】

上記したルールに反しない限り、プレイヤーのあらゆる行動を許可
する。

また、クリア条件を満たせなかった場合、もしくはルールに違反し
た場合は、そのプレイヤーを失格とみなし、首輪を爆破する。

【ルール6】

ゲーム終了時点での生存者全員を勝利者とし、10億円の賞金を山
分けする。

ルールについては大体予想できていたのでそれほど驚くことは無かった。この首輪という名の束縛を与えることによって他者と闘争させるのがこのゲームの主催者の狙いであり、その狙いは絶対に外れないように仕向けられているのだろう。クリア条件を満たさなければ死ぬ、という余りの理不尽さに煉は少しだけ舌打ちをした。

（賞金……か——）

最後のルール6に書かれている賞金に関しては信憑性が低いため、あまり期待できないだろう、と煉は思った。ただ、このように多額の賞金をチラつかせる事によって賞金を独り占めするために不必要な殺人に走る者が出てくる、という事をよく考えておかねければならないだろう……。

「これからどうしようか……」

食事を終わると辺りが少しだけ明るくなっているのに気がついた。煉のクリア条件はどちらかと言うと他者を守るほうの側に当たる。相手を傷つける事よりも守るほうが数倍難しいのはよく分かっているが、強制されているのだからやるしかないだろう。

——例えどんな困難が待ち受けようとも、東条煉は生き残らなければならぬ。

生を掴み取らなければならない――

？「取りあえず、村のほうへ向かってみるか……」

？「もう少し周辺を探索するか……」

「取りあえず、村のほうへ向かってみるか……」

こんな殺伐とした空間にずっといる必要性はあまり感じられないだろう。それに、このどうしようもない状況下であると、先ずは人がいるかもしれない平地——ここでは村を目指すのが定石なのだ。好戦的な相手がいるという可能性があるが、いま煉の手元には拳銃が一丁あるので相手が相当なやり手でない限りかなりの抑止力になるだろう……。

煉は荷物をまとめ、鉄製の箱に白い箱の残骸を入れてから埋め直し、こんもりした地面を軽く何度か踏みつけて村の方へ歩き出した。一応これはゲームなのだから、何か救援物資の様なものが存在しているという事を他のプレイヤーになるべく知らせないようにするべきだと思ったのだ。

まだ始まって間も無いが故に断言することはできないが、恐らく煉が偶然見つけた——メモリーチップが入っていた白い箱はそんなに数があるものではないと思われる。化石燃料のように、これがかなり有限な……それも数が少ない場合、できるだけ独り占めできた方が有利な立場になるのは明らかだ。なので、例えば中身を取り出した何も実用性のない残骸であったとしても、そういうものが存在して

いるという情報を与えてはいけない。少し頭が回る人間ならば、すぐにこれらの存在について悟ってしまうからだ――

煉がその場を完全に立ち去り足音が聞こえなくなると、そこは再び虚無で殺伐とした空間に引き戻された。銃声によって辺りに潜んでいた獣や鳥が立ち退いていたので、その空間は更に静けさを増しており、3厘離れた場所の小さな音でも鮮明に聞こえそうだった。

そこへ向かってきた――無の空間を裂くような1つの足音。

「はあ……はあ……ん？　この辺だと思ったのだけれど……気のせいだったのかしら？」

1つの声がポツリと響くが、誰もその声には答えない。満月に照らされている……少し赤みを帯びた長い髪は、まるでそこが燃え盛っていると錯覚してしまうようで――

「……ふーん。なかなかやり手がいるってこと、ね」

暗くて見落としがちになりそうな、ほんの僅かな土の盛り上がり
彼女を目を細めながら見つめる。経験者ならば、発砲せずともそれ
が何なのかは分かっている。だからここにいたと思われる者は、初
心者でなかなか賢い人間だろう……。

「悪いほうへ行かなければいいのだけれど……」

その賢い人物と手を組むことができれば、この忌々しいゲームを平
和に終わらせれる可能性が格段に増えるので期待する事ができる。
しかし、逆に戦闘狂のような害となる人物だった場合……それはも
はや彼女の足を引っ張る要素以外の何者でもない。

有能な人間は両極にしか働かない。

だからこの事は彼女に対して嬉しい思いをさせてくる反面、苦い思
いもさせてくるのだった。

「——なっ!？」

色々と頭の中で考えている最中に突然電源を落としているはずのP
DAから電子音が鳴り響き、思わず抜けた声が漏れてしまう。彼女
はポケットから五月蠅いそれを取り出して画面を押す。

「あっ——」

画面に映し出された内容を見ている彼女の顔は少し間抜けになった。それは、彼女は一度だけ同じことを経験しているからであって、初心者には各々の顔を悩ませていることだろう――

同刻、煉も突然騒がしく鳴りだしたPDAの内容を確認していた。静かなこの森の中で気が張っている状態なので心臓に悪いだろう、と愚痴を漏らしながら送られてきたメールらしきものを確認してみると、煉は少しだけ顔をしかめた。

（説明会への御案内……か）

運営らしき者から送られてきた業務的なメールに煉は舌打ちをする。

『参加者の方々へ、重要な連絡です』

『先ほど、基本ルールを配信しましたが、恐らく全ての参加者の疑問を解消するには至らない、と思われます』

『つきましては、一度、参加者を集めての説明会を開きます』

『会場は村の中央管理施設となっておりますので、参加を希望する方は、村の北東にある白い建物へ集まってください』

『なお、参加は自由であり、不参加の方へのペナルティ等はありません』

地図を確認すると会場となる施設のようなものが確認することができ、煉の現在位置からは少し遠いくらいという感じだろうか。なぜ運営がゲーム開始から早い段階でこのメールを送らなかったのかは謎だが、取りあえず煉は説明会に参加することにした。

恐らくこのメールは参加者全員に送られているはずだ。つまり、一般的な流れだとこの説明会に行けば他の参加者と出会うこともできる上に、ゲームの詳細について聞けるので、特に悪いことは無いだろう。寧ろ、この説明会に参加しない不利益が多すぎて参加せざる

を得ない、と言ったところだろうか……。

（それに相手がどの程度か、を確認することもできそうだしな）

敵、味方等は関係なく、このゲームに参加している人物の戦闘能力や賢さや人間性がどのような感じであるかを確かめる事ができるといふのはかなり大きいだろう。馬が合いそうであれば組んで協力する、という手も無くはない。

やはり人1人でできる事というのは、幾ら努力しようとも限られてくる。煉もその例外には当てはまらず、できれば誰かを信用して協力したいと思っている。ただ、組むならば最低限でもちゃんと芯が通っていて合理性がある人物で無ければならない。ブレていてあまりに感情的な者は何をしてくるか分からないので勿論御免である……。

「百聞は一見に如かず……ってか？」

色々と考えていると、いつの間にか歩みが止まっていて全然前に進んでいなかった。もう辺りは大分明るくなっているので特に足場を気にすることなく進んでいけるだろう。ただ、一応キューブの件の事も考慮して、それなりに道から外れた所を通って歩いて行くことにした……………。

（やっぱり誰も居ないか……）

小型のPDAの地図を頼りに村の中央管理施設というものを目指しながら歩き続けたところ、思っていたよりも早く下山することが出来て、すぐに錆びれた村が視界に入った。適当にいくつかの民家の中に侵入して見たところ、その錆びれた雰囲気を裏切るような事はなく、完全に無人であった。日用品がいくらあつたが、どれも使い道があるようなものは見当たらず、埃を被っていたり黄ばみがあったり、という事からかなりの間放置されているという事がわかった。

蔵に農具等があるかと思つて探してみたが、どうも全てを出し抜かれていたようだった。やはり、ちゃんとした武器となる道具はこのメモリーチップでしか手に入らない、という事なのだろうか………

説明会の具体的な開始時間は記載されていないが、あまりにも道草を食っていると運営に参加意思が無いと取られる可能性がある。なので村の中で回りきれなかった場所は説明会の後でじっくり調べることにした。

（あれが、中央管理施設か？）

どちらかというと暗色系でどんよりとした村の中に、1つだけ異常に目に入る白い施設があった。一般的な学校のようなものを連想させるその施設にはツタが被っていないくて、かなり整備されているようである。門に足を踏み入れると敷地に複数の足跡が見えたので、煉よりも先にここへ足を運んだ人間がいるという事が分かった。

「ふう……」

銃弾の装填数を確認し、再び懐へ隠すと煉は中央管理施設の中へ入った。入ってすぐの所に『説明会は2階です』と階段を上るように促す張り紙が貼られていて、それに従って進んでいくと2階には矢印の張り紙が貼られていた……。

いくつかの矢印を経たところで、煉は足を止めて廊下の壁に耳を当てた。

（あの部屋か……？）

男女の話し声が聞こえ、たまに笑い声も聞こえていることから談話をしている事が分かった。

煉は足音を立てないようにゆっくり進んでPDAをポケットから取り出して操作をした――

（……なッ！？）

煉の特殊機能は『半径10m以内にある自分以外のPDAのプレイヤースタンプの合計数を表示する』というものだ。つまり、部屋を廊下を隔てている廊下越しでも十分に行使できる範囲である。なので数はどうであれいくからの数字が画面に浮かび上がると思っていた……。

しかし、煉のPDAの画面には『特殊機能を使用することが出来ません』という理解不能な言葉が並べられているのだ。

（いや……待てよ――）

動揺しすぎて頭が真っ白になっていた最中、煉の頭の中に1つの可能性が思い浮かんだ。

『この部屋の中のプレイヤーの中に、特殊機能が無効化できるPD
Aを所持している者がいる』

恐らくは煉と同じ範囲性で行使できる特殊機能であり、煉はその範囲に侵入したから特殊機能が無効化されたのだろう。範囲は恐らく煉と同じくらいかそれ以上であり、ある意味一番強い特殊機能かもしれない……。

(……やっぱりな)

部屋から少し離れて特殊機能を使ってみると、『Player Counter 0』と記載された。そして、もう一度部屋に近づいて使ってみると……使うことはできなかった。やはり『特殊機能が無効化する』という特殊機能を備えたプレイヤーがこの中にいるという予想は間違っていないだろう。だとすると、煉よりももっと強烈な特殊機能が存在している可能性があるのです、今後はよく注意しておかなければならない。

何はともあれ、扉越しに明るいきい声が聞こえる空間で特殊機能無効化というものが発動されている事から、やり手が何人か潜んでいるのは間違いない。

(さて……そろそろ入るか)

それがどうであるかは、東条煉本人の目で確かめる他無いだろう。

ゆっくりと扉を開いたその先に見えたのは……………

部屋に入った瞬間に目に入ったのは色々な制服を着ている4人だった。全員煉と同じ首輪をしていることから、この4人は煉と同じ境遇の人物であるのだろう。また、煉はこの4人に面識が無いし、彼らも醸し出している微妙な距離感や雰囲気から、知り合いであるという感じはあまりしなかった。どうやら、このゲームはプレイヤーを高校生を中心として行うものらしい。まあ、考えてみれば老人や小さな子供よりも、体力があって活気のある若者にさせた方が動きがあって面白いだろう……。

「お、またまた新入りの登場じゃん！」

煉が部屋に入って来たことに対して一番に反応したのは茶髪にピア

スという典型的なアレ……という感じの男だった。他の4人の様子を見る限り、他人同士という壁を打ち破って繋ぎ合わせているのは彼のようにだった。外見という点は兎も角、こうした雰囲気を作れる能力はなかなか得られるものではないので羨ましいと思う。

「ええと……ここが説明会がある場所なのか？」

「そうだぜ。あ、俺は伊藤^{いと} 大祐^{だいすけ}！ よろしくな！ そっちは？」

「俺は東条煉。……よろしく」

伊藤が握手を求めてきたので煉は軽く握り返して笑顔を送った。どんな人間なのかは分からないが、第一印象が良い事に間違いはないだろう。煉はあまり第一印象を良いと受け取って貰えないので、その点については少しだけ彼が羨ましかった。

「初音も自己紹介するのです！ 初音は阿刀田^{あとうだ} 初音^{はつね}なのです〜！
レン、よろしくなのです〜」

阿刀田はパツと見では幼女なのだが、一応制服を着ていることから高校生だという事は分かる。喋り方がアレなのだが、どうも容姿にそれが似合っているのか、それほど気になることはなかった。

「僕は三ツ林 司。よろしく、東条先輩」

三ツ林は見透かすような目で煉を見ている。落ち着いた言動と仕草は同年代の伊藤や阿刀田と比べると物凄く大人びて見えてしまった。もしかしたら彼が『特殊機能無効化』を使っているのかもしれない……。

「私は上野 まり子。よろしくね」

上野はこの4人の中では一番真面目そうだと感じた。ただ、あまりに真面目すぎるとその真面目さがこのゲームでは枷となるだろう……。まあ、忠告したところで人間性というものはすぐには変わらないのでどうしようもないのだが。

「俺は藤田 修平。よろしく」

藤田は人間性がどこかしら煉と似ているような感じがした。彼も三ツ林と同様、特殊機能を使っている人物の候補として上がるだろう……。

「ん……その制服ってさ。もしかして、かの超過酷な青王学園か！？」

「ま、まあ、そうだけど……」

青王学園――

都内から少し外れた場所にあるアメリカ軍事基地内に、特別に設立された護衛術専門学校である。入学に必要な試験などは無く、誰でも簡単に入ることはできる。

だが、一般的な高校生とは違う――2年半に渡る特殊で過酷なカリキュラムによる教育によって自主退学する者が後を絶えず、卒業率は良い年度で2割程度というものだった。先ずは1年目に自衛隊員が行うものと同じような訓練を行い、護衛に必要な基本的な精神と肉体を作り上げる。そして2年目からは護衛術の座学から始まり、それを実践して技術を身に付けていく。

そして残ったあと半年は、護衛を要している大統領や大企業の社長などの元に雇われに自分を売りに行くのだ。大体大物に付き添っている護衛人は青王学園の卒業生であり、世界からは有り余るほどの多大な評価を受けているので、何もしなくても勝手に就職することができる。

勿論2年間の地獄を潜り抜けた、卒業予定である10人の中の1人

の東条煉の元にも、何本もの雇用の知らせが来た。

しかし……煉はその誘いをすべて断り、日本防衛大学に進学することにした。周りの卒業生や教師に嫌というほど引き留められたが、煉はそれを全て振り払ったのだ――

――
――
――
――

「す、凄いわね……。私の知人で行った人がいたけど、1週間くらいで辞めたって言うてたもの……」

「そ、そのせーおー学園？ ……っていうのはそんなに凄いのですかー!?」

「凄いつてレベルじゃねえぞ、初音ちゃん！地雷があるって分かっただけでそこに自ら特攻するくらいやばいつての！」

「ふ、ふええ……レンは凄いです……」

「はあ……どうやったらそんな例えで理解できるのかしらね」

「……確かに」

伊藤と阿刀田の間にはテレパシーか何かが存在しているらしい。上野は溜息をつきながら2人を見ているが、どこかしら羨ましそうに見ている感じがした。まあ、人の考えている事なんて全然分かりやしないので、特に気にすることは無いと思うが。

チラリと藤田と三ツ林の方を見ると、会話に参加するチャンスを失ったのか、それとも単にこんな馬鹿げた会話に参加する事を嫌がっているのかは分からないが、完全に無視をしてPDAを弄っていた。

「なあー、そこのお2人さんもずっと黙っていないで、こっちに来てようぜ！」

阿刀田とじゃれていた伊藤が2人の様子に気が付き、ゆっくり近づいて会話の参加を促す。伊藤は少しおちやらけた所がありそうなので、あまり空気を読むことができるタイプではない気がするが、どちらかと言うといまは藤田と三ツ林のほうが空気を読めていないと思われる。煉もあまりこうしたダラダラとした会話はしたくないのだが、苦手ながらも一応参加をしてその場の雰囲気崩さないようにしているというのに……。

「悪い、ちょっと考え事をしてたんだ」

藤田は強張っていた顔を少し崩してこちらの円に入ってきた。考え事、というのは特殊機能無効化についての事なのだろうか……。

「ほら、司もこっちで話そうぜ！」

「はあ……分かりましたよ」

三ツ林も渋々といった顔で輪に入ってきた。そんな時、一瞬だけ彼の鋭い視線が煉の事を突き刺しているように見えたが、すぐに元に戻ったので気のせいだろうと考えた。

「うし、これで全員揃ったな——」

全員が一か所に集まってからは他愛もない話や、本当にどうでも良い話などが続いた。ほとんどの話題は伊藤が出してきたのだが、正直なところどれだけ話題を持っているんだ、と感心するほどに彼の

口は常に動き続けていた……。

『……………説明会への参加希望者全員が揃ったようなので、そろそろ説明会を始めます』

そんな立て続けられていた会話の火も消えかかってきた頃、感情の無い放送の声が全員の耳を刺した。特に藤田と三ツ林については目を大きく見開いて音源の方向を向いていた。

（希望者全員って事は、ここへ来ていない参加者がいるって事か？）

何も分からないこのゲームについての説明会にこない参加者など本当に居るのだろうか、と煉は思った。もしかしたらかなり重要な情報がこの説明会で手に入るという可能性があるのに……。いや、もしかしたら説明会など必要無い、と軽く見ている愚者がいるのかもしれないが――

『まず、この説明会の進行上においてのルールについて確認して貰います』

『これから、大まかなこのゲームについての説明をしますが、質問に関してはゲームについてだけ返答、とします。ゲーム以外の事については一切の返答を遠慮していますので、注意してください』

つまり、この説明会はこのゲームの為だけに設けられたものであって、個人的な感情や思いに対する返答は行わないという事だ。このことを言っておかなければ、一々参加者の感情に対応しないといけないので、まだ始まって間もないこの時に明言したのだろう。

「ちょっと待って！ 拉致された私たちには何も言う権限が無いっていう事なの！？」

『ゲームに関する事ではないので答えることが出来ません』

「……………ッ！」

上野がさっそく感情を剥き出しにした声で語りかけてくれたが、やはり返答は無かった。彼女も薄々そのことには気づいていたのだとは思うが、感情を抑えきれなかったのだろう。

『質問がないようなので、説明を始めます——』

説明会が中盤に差し掛かったところで改めて内容を整理してみると、それは非常に酷いものだった。

まず、このゲームは監視カメラを通してどこかで娯楽として放映されているらしい……。こんなことをして何が面白いのかは理解できないが、見世物にされているという屈辱を味わいながらやるしかないだろう。

ゲームフィールドは25区分されたエリア内であり、そこから出ると首輪が爆発するようだ。三ツ林の質問から、首輪の爆発は発動から15秒後であり、威力は致命傷程度……という事が分かったが、恐らくは生首が吹き飛ぶほどの即死クラスと考えていいだろう。なぜなら、首輪が発動して死なないのならば全員痛みを堪えてエリアから抜け出せばいいし、別にクリア条件を満たさなくてもどうになるからなのだ。

ゲームの期間は、ゲームを盛り上げるために残り24時間となった時点で知らせてくれるらしい。恐らく、ここまでセッティングをして2日や3日で終わってしまったては色々と勿体無いと思われるので、最低でも4日は続くと煉は考えた。

それと煉にとって聞きたかった情報——キューブについても聞くことが出来た。キューブとは煉が偶然見つけたあの白い箱であり、あの中に入っているメモリーチップの情報によって、飲食物や武器などなど参加者にとって生き残るために必要な物資が手に入るようだった。

煉は既に武器となる拳銃、そして中央管理施設に来るまでに1つメモリーチップを手に入れていたので、見たところこの中ではゲーム出だしでは少しリードしている状況なのだと思う。ただ、もしかしたらここにいる参加者の中には煉よりももっとメモリーチップを持っている者がいるかもしれないが……。

『続きまして、PDAやそれに関する事について説明します』

『まず、このゲームの参加者は14人です。そして、その14人にはゲーム開始時点からそれぞれ異なるプレイヤーナンバーのPDAが渡されています』

「PDAの色や形は全部統一されているの？」

運営が間を置いていた時、三ツ林が手を挙げながら質問をして運営の対応を待っていた。彼は事あるごとに一番多く質問をしていて、運営からの返答を聞いて頭の中で色々と整理しているようだった。

『はい。14人とも大きさや重さ、色など、プレイヤーナンバーやクリア条件、特殊機能以外の点についてはすべて同じとなっています』

「どうも」

彼は満足げな顔をしていつもの肘立てのポーズに戻った。煉はそれほど頭がよくないので、彼がこの質問でどんな事を得たのか分らないが、取りあえず三ツ林が頭が回る人間でありそうだという事は分かった。

『プレイヤーナンバーについてですが。トランプを催しまして、A

からKの13個、そしてジョーカーを合わせた合計14個です。一応数字の低い順に並べますと、A、2、3、4、5、6、7、8、9、10、J、Q、K、ジョーカー、となっております』

（1から13という事は……全部で大体90くらい、か？）

ジョーカーを除くプレイヤーナンバーを合計すると91となる。それに対して煉のクリア条件に必要なプレイヤーナンバーの合計数は21であり、煉のプレイヤーナンバー：10、があることから条件としてはあまり難しくはないだろう。

ただ、もし他のプレイヤーの殺害というクリア条件がある、という場合を考えると何もしないでいれば良いというわけではなさそうだ……。

「ジョーカーについて説明してくれないか？ 1つだけ数を成さないというのは色々と不都合になると思うんだが」

今度は、しばらく黙っていた藤田が声を上げた。煉も聞こうとしていたのだが、どうも彼らにはいつも先を越されてしまっていて実質煉は伊藤や阿刀田と同様になにも言っていない状態になっている。

『ジョーカーはいわゆるワイルドカード、というものです。トランプで一般的に行使されている様な感じで、ある条件下で他の数字に変化することが出来ます』

「……そうか」

その『ある条件下』というのは特殊機能だという可能性が高いが、その内容はゲームの都合上教えて貰える事はできないだろう。それを藤田も悟っていたのか、これ以上の言及は控えていた。

『次は、クリア条件に関して。クリア条件は既に各々確認していると思います』

『クリア条件がどのようなものか、という例を挙げますと……例えばプレイヤーナンバー2のクリア条件を「全てのエリアでメモリーチップを手に入れる」とする場合、そのプレイヤーはゲーム終了時までそれぞれのエリアで計25個のメモリーチップを手に入れなければなりません』

実際にそんなクリア条件があつたらほぼクリアできないだろう、とキューブの希少価値を知っている煉は心の中で苦笑いをした。もしかしたら実在しているクリア条件を探るヒントにでもなるかもしれない、と考えていたのだが、そこらへんの所はやはり手を抜いては来なかった。

『もう1つ例を挙げますと、例えばプレイヤーナンバー1のクリア条件を「生存者数が10人以上」とした場合、ゲーム終了時まで

生存者数が9人になった時点でそのプレイヤーの首輪が発動します』

つまり、煉のクリア条件ならば生存者のプレイヤーナンバーの合計数『21』という数字を下回った瞬間にゲームオーバー、という事である。そう思うと、何の前触れも無くいきなり首輪が発動して死ぬというのは物凄く怖いものだと感じた。

「そ、そんな……………」

「ば、爆発は怖いのです……………」

しばらく黙りこんでいた上野と阿刀田は、小さな声を漏らしながら首輪を震えた手で摩りながら顔に恐怖を浮かべていた。もしかしたら彼女たちのクリア条件は他のプレイヤーが関与するものなのかもしれない…………。

「…………なあ？　他のプレイヤーと手を組んだりするっていうのはアリなわけ？」

『はい。それも、ゲームの一環として参加者が取る行動の内の1つなので』

「成程…………。だったらさ、皆で手を組まねえか？　お互いにクリア

条件を見せ合えば、協力しやすいだろう？」

確かに、クリア条件を晒し合えば互いの目的が明確になり、今後の行動についてもギクシャクせず、円滑に進めることが出来るだろう。ただ、これは紛れもなく自分の生命を賭けたゲームなのだ――

「その提案には多分、ほとんどが賛成しないと思うよ」

「ま、マジか……！ でも何でなんだ？」

「クリア条件を見せ合うまでは上手くいったとしても……もし、誰かのクリア条件が競合していたとしたら？」

「そ、それは……問題、だな」

「明言はできないけど……このゲームで『情報』というのはかなり重要な要素になってくと思う。それを簡単に晒すというのはかなりのリスクを伴うはずなんだ……そうなんだろう、運営？」

煉が説明するよりも運営にやってもらった方が分かりやすいだろう、と思って無機質な放送音が流れる方向を向いて語りかけてみた。これは一応ゲームに関する事なのでそれなりの答えを貰える事だろう。

『はい。確かにこのゲームにおいて「クリア条件」や「特殊機能」というのは言わばそれぞれの個人情報のようなもので、他のプレイヤーに知れ渡ったとすれば、それだけ上手く利用されたり戦略を立てられたり、と一般的にプレイヤーにとって不都合なことが起きることが多いかと思われます』

「……だから、全員がそう簡単には情報を明かすことはできないってことなんだよ」

「確かに、言われてみればそうだなー……」

伊藤は一応納得してくれたいらしい。こういう部分では少し抜けた所があるらしいので、煉としてはあまり組みたくない相手である。学校で軽く絡む程度の関係だったら良い相手だとは思うのだが――

『ちなみに、最初に送ったメールに記載されている通り、このゲームでは指定されたルールを破ること以外の行動はすべて許されます。例えば、クリア条件上やむを得ず誰かを殺害しても……もしくは、クリア条件に関係なく誰か殺害して頂いても構いません――』

「ちょっと……ッ！　あなた……今の事を本気で言ってるの!？」

歯茎が剥き出しになるほどに歯を強く噛みしめ、両手を強く握りしめている上野の声はものすごくトーンが低かった。

『ゲームに関する事ではないので答えることが出来ません』

そんな彼女に対しての返答は、感情のない無機質な放送音だけだった。これは別に彼女に意地悪をしているのではなく、業務上こうなっているであって、別に運営に悪気があるわけではないのだと思う。しかし、いまの彼女にとってはその事が煽りにしか感じられない訳で……。

「……ふざけないで、頂戴！！　こんなことが……社会で通用すると思って——」

「静かにしてもらえませんか？」

怒りが最高潮に達した上野を咳込みをしながら止めたのは三ツ林だった。余りにも上野が叫び続けるならば煉も止めようと思っていたのだが、予想以上に早い段階で彼女を止めた三ツ林にすこし驚いた。

「……三ツ林君は何とも思わないのツ！？　こんな理不尽な——」

「その思いを今、アレにぶつけた所でどうなるって言うんですか？」

三ツ林は放送音が流れる場所を指さしながら真顔で上野に言葉を放つ。彼の言っていることは紛れもない正論で、どこにも揚げ足を取れるような場所がない……。

「……おかしいわよつ。こんな、場所に連れてこられて、なんでそんなに、冷静で、いられるっていうの！？　こんな……こん、なのってッ——」

目を少し潤ませた上野の震えた声が会議室の中でポツリと漏れる。彼女はどうしても理不尽で不条理なことが許せないらしい。その感情は人間として素晴らしいものだと思う……が、それだけでは人間は生きていけない——

「……ほら、ちゃんと説明会を聞かないと。まだ、終わってないんだしさ」

ポケットからハンカチを取り出して上野に手渡す。どうも泣いている女性を見ていると——思い出してしまう。

だから、早く泣き止んでほしかった。

「……東条、君も、なの？　おかしいのは、私、だけなの？」

「いいや。俺だって……いや、みんな上野と一緒にの事を思っている」

こんな意味不明な状態に突然置かれて、はいそうですか、とすぐに認められるものなど居ないだろう。煉だって現実を受け止めているかのように見えるが、心の奥底では夢であってほしい、こんなことがあって良いはずがない、と思っっているのだ。

微塵もそう思わない者など……もはや人間ではないだろう。

「だったらなんで……っ」

人間である限り、心を完全に潰すことはできない。だから人間は感情を殺して強くなるのではなく、感情を抑制して強くなるしかないのだ。

人間の強さというものは……如何に理不尽で過酷な現実を目の前に、堂々と出向いて歩んでいけるかどうかである――

「いま俺たちがここに居るっていうのは現実なんだ。だから、遅か

れ早かれこの現実を受け止めないといけない……受け止めないと、死ぬんだから」

「……………ぐす」

「俺は、生きたい。生きたいから……こんなところで終わりたくないから、俺はこの現実を受け止める。このゲームをクリアして、絶対に生き残りたいんだ」

『生きたい』

誰でも本能的にそう思ってしまう感情である。

どんな困難が、死にたくなるくらいに苦しいことがあっても、どうしてか人は生きたがる。しかしながら……人間に取って生きる理由なんてものはないのだが、愚者はそれに無理矢理理由をつけようとする。

そう、東条煉もその愚者の中の1人なのだ。

いや……正確に言うと、煉は理由があったから今まで生きてこられたのかもしれない――

「上野、お前はどうしたいんだ？ 生きたいのか？ それとも……いつまでもこのまま現実と背中合わせで行動していくのか？」

煉のいつもは少し高めな声が低くなったとき、そのギャップで彼の言葉はいつもに増して重いものとなっていた。真剣になると少しだけ口調が変わってしまうのは、今更治することが出来ないので、しょうがないだろう。

「……ごめんなさい。私だけこうやって子供みたいに我俣を言ってみたね」

「き、気にすることはないですよー！ 初音だってまり子と同じ気持ちだったのですよー！」

「……ありがとう、初音ちゃん——」

こうしたところでフォローを出せる初音はすごく良い奴なんだろう、
と思った。小さいながらもよく考えているのだろぅ……と、こんな
ことを口に出したら怒られるので悟られないようにしておくことに
した。

「三ツ林君、ごめんなさいね。私が甘かったみたい……」

「はぁ……泣きながらこつちを見ないでください。なんだか僕が悪
者みたいじゃないですか」

参ったと言わんばかりに額に手を当てている三ツ林の様子を見る限
り、どうやら一件落着いたようである。彼も無愛想には見えるが、
本性は人間味のある奴なのかもしれない……。

『PDAの操作方法についてですが……皆さんはどうやらもう使い
方を分かっていると思われませんが、説明が必要であれば挙手してく
ださい』

少し和やかな雰囲気になっていた会議室に再び舞い戻る無機質な声。
それによって一気に全員が現実引き戻され、顔が引きつっていた。
PDAの操作については老人でもすぐに覚えられるような感じだっ
たので、現代の若者にとっては朝飯前くらいである。なので、全員
とも手を挙げなかった。

『……………説明は必要ないので、次に進みます』

『これから説明することは、ルール6に記載されていた…………ゲームの勝者に対する賞金についてです——』

01（後書き）

後書き

00の方にルール6を勝手に追加したので、一応確認をお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4252s/>

シークレットゲーム CODE:Revise ~ The Number Limitation ~

2011年10月7日00時48分発行